みやぎ

仙台、名取など4市町災害住宅調査

震災思い出し涙もろく21%

住民集うイベント希望83%

傾聴の会まとめ

東日本大震災後に被災者の心のケアに当たるNPO法人仙台傾聴の会(名取市)が、仙台、名取、岩沼、亘理の4市町の災害公営住宅の住民を対象に初めて実施したアンケート結果をまとめた。21%が震災を思い出すと「涙もろくなった」と回答。83%が、外出の機会となり住民同士がつながれるとしてイベントを開き続けるよう希望した。

震災を思い出すのは「ニュースや映像を見聞きした時」が35%で最多。「昔のことを思い出した時」が16%で続き「日中に1人でいる時」と「知り合いの訃報を聞いた時」が共に11%だった。

思い出した時にどうなるか尋ねると「涙もろくなった」のほか「夜眠れない」(14%)や「誰かと話したい、話し相手がほしい」(12%)などがあった。

災害公営住宅転居後に1日の過ごし方が変わったと答えた住民は65%だった。

理由は「集会所でいろいろなイベントがあって楽しい」(16%)「友達が増えた」(12%)と前向きな回答がある一方「夜中に目を覚ますことが増えた」(8%)「テレビに向かって話している時がある」(6%)などの回答も目立った。

買い物など外出の頻度は「週1、2回」が43%に上り、傾聴の会が実施する「傾聴カフェ」などのイベントを継続してほしいと願う住民が多かった。

同会の森山英子代表理事は「住民が人とのつながりを求めている姿が浮かび上がり、集う場を開き続ける必要があると痛感した。自室から出てこない方への対応も懸念材料だ」と話す。

アンケートは昨年10、11月、4市町の災害公営住宅の集会所で開いた傾聴カフェの参加者ら350人に配布。190人が答えた。3月1日発行の会報に結果を掲載する。連絡先は同会70(2025)8200。